

20240914（土）

香川県埋蔵文化財センター考古学講座

令和6年度第2回

「讃岐の素焼き風呂釜」

真鍋 貴匡

はじめに

讃岐の素焼き風呂釜は讃岐特有の焼き物で、県外では同様のものをみることはほとんどない。また、素焼き風呂釜が存在したこと自体も県内ではあまり知られておらず、使用方法や形状の特徴などを紹介する。

1 日本の風呂のはじまり

各家庭に風呂の設備を設け、毎日風呂に入るようになったのは昭和時代に入ってからといわれている。最も簡易に身体を洗う行為は海や川での行水であったと考えられるが、温めた湯につかる蒸気を浴びて身体を洗う行為が広まったのは、仏教伝来が契機とされ、当初は治療目的で行われたといわれる。現在でも近畿地方の大寺院などにのこされている中世の蒸し風呂や浴堂がその名残である。当初は蒸し風呂が主な入浴方法であったが、次第に湯をためる入浴方法も広まっていった。

湯をためる入浴方法は、江戸時代から昭和時代にかけてひろく普及し、鉄製の窯を用いた五右衛門風呂である。一方の讃岐では、五右衛門風呂以外にも素焼きの風呂釜が使用されていた。それらは発掘調査では遺物として、現存するものは民俗資料として収蔵され、現在でもみることができる。

2 讃岐の素焼き風呂釜再発見と江戸時代の記録

本講座で呼称する讃岐の素焼き風呂釜は、古くは土風呂（つちふろ）、瓶風呂（かめぶろ）などと呼ばれていたが、釉薬をかけていない素焼きの釜に水を溜めて湯を沸かすという特性から「素焼き風呂釜」と呼称する。

現在では素焼き風呂釜は瀬戸内海歴史民俗資料館をはじめ県下の資料館に昭和初期まで使用されていたとみられる素焼き風呂釜が十数点収蔵されている。広く世間に素焼き風呂釜が認識されるようになったのは、讃岐習俗参考館の館長であった荒木計雄氏が昭和56年に素焼きの風呂釜が現存しているのを確認し、世間に公表したのを契機とされている。荒木氏は昭和時代後半に讃岐の民芸品の収集や伝承活動に数多くかかわる中で、約20年間の探索のちに発見し、復元研究も行った。その研究で明らかにされた風呂釜の製作台に記された年号から昭和5年頃まで製造されていた可能性がある。

江戸時代の記録

下記の3つの紀行文に、素焼き風呂釜の記録などが残されている。特に十辺舎一九の『続東海道中膝栗毛』が有名だが、初出は1700年代後半にまとめられた百井塘雨『笈埃随筆（きゅうあいずいひつ）』が最初である。

- ・百井塘雨『笈埃随筆（きゅうあいずいひつ）』（1700年代後半?）
- ・菱屋平七『筑紫紀行（ちくしきこう）』（1806）
- ・十辺舎一九『続東海道中膝栗毛（ぞくとうかいどうちゅうひざくり）』（1810）

百井塘雨『笈埃随筆』

「…四国には竈を焚て、その上に大なる壺を置き水を入れ、下より直に壺を焚て入るなり。又浜辺々々には風呂を焚て沸時、貝を吹き、竹を吹て知らず…」

3 讃岐の素焼き風呂釜

<素焼き風呂釜の形状>

素焼き風呂釜は、現存するものと発掘調査で出土するものとの間に、形状の差がほとんどみられない。構造は通有の五右衛門風呂と同じく、上部に水が溜まる槽と下部に火を受ける釜を設けるもので、やや下がすぼまる筒型の形状（高さ約70cmで直径約70cm）を呈する。またサナ（ゲスイタ）受けよりやや上に、サナ（ゲスイタ）の浮上防止の爪が3か所あり、底付近には湯の排水孔がある。

ただし鉄製の五右衛門風呂と異なる箇所が2点ある。1点目は槽のみ素焼きで作り、釜部分を鉄で別づくりして、後付けするものがあること、2点目は火を受ける釜部分が一緒に作り出されるものは、窯部分が逆碗の形状をしていることの2点である。

1点目の釜部分が別作りされているものを如何にして別造りの釜を取りつけたのだろうか。発掘調査資料ではどのように取り付けられていたかはわからないが、三豊市詫間町民俗資料館に寄贈された資料にヒントが得られた。寄贈資料は三豊市詫間町で実際に使用されていたもので、大町（牟礼町）で製作されたものと言われ、筒型の風呂枠の底面に逆碗の形状をした鉄製の釜が取り付けられていた。接着部位には漆喰とみられるものが貼り付けられている。江戸時代においても同様の方法で取り付けられていたものとみられるが、発掘調査で出土した資料からは、漆喰などの痕跡が残っておらず、また底面まで煤けている状況から、接着方法については、さらに調べる必要がある。

2点目については、通常の五衛門風呂にはみられない形状である。このことについては、荒木氏が再現実験でも述べており、土製の素焼きであることから、湯量の水圧と人間が入ることで増す圧力によって割れないよう、釜部分を逆碗状にすることで圧力を分散させ、圧力を逃がしていると考えられる。

<発掘調査で出土する素焼き風呂釜>

発掘調査では、近世から近代にかけての遺構から出土しているが、報告されているもの

を集成すると破片も含めると 30 点ほどで、さらに全体の形状が分るものは限られる。それらの限られた資料から素焼き風呂釜の特徴を見ていきたい。

特徴的な部位を抽出すると、底の有無やサナ（ゲスイタ）の形状、サナ（ゲスイタ）の浮上防止の爪の有無、帯、帯の文様、底端部・底部の形状、胎土、色調などの特徴がある。さらに、それらの部位における形状によって、さらに細分される。

表に示した特徴と大まかな年代の推移とに大きく 2 段階にまとまりがある。資料数が少ないため、今後変動する可能性はあるものの、現状の整理として以下に段階ごとの特徴をまとめた。

第 1 段階

18～19 世紀にみられるものは、釜部分の底を有し、底端部を丸くおさめ、脚部の形状は環状か、二脚のものがある。さらには胎土に雲母を認めず長石を多く含み、器壁の色調はやや白みがかっている。帯は多条にめぐる。

第 2 段階

19 世紀以降にみられるもので、窯部分は底を有するもの以外に、底を一体で作らないものが登場し、底端部は角ないしは L 字を呈し、脚部は環状にする。胎土は雲母を認め、色調は茶色がかかる。帯は最下段と最上段、もしくは帯自体がない。

〈生産地の検討〉

これらの中で、時期的な差が明確であるものは脚部の形状と胎土の組成と色調である。胎土に注目すると、雲母を含む土師質の製品は、既往の研究成果から、焙烙などの生産地の一つである高松市御厩で生産された製品に多くみられるものであることが分かっている。第 2 段階に多く見られる雲母を含んでいるものを、御厩の製品だと仮定すると時期的な推移は、以下のような仮説が提示できるのではないだろうか。

第 1 段階には御厩以外のもう一つの生産地である三豊市岡本で生産されていたものが、第 2 段階に移行すると、御厩でも生産が開始され、さらに広く流通したのではないだろうか。第 1 段階の高松城跡（丸の内地区）で出土しているものには、雲母が入っておらず色調も白みがかっているものがあり、胎土だけみると御厩で生産されたものとは言い難い。当該期に御厩で生産されていたのであれば、比較的近い御厩からの入手が容易いと考えたくなるが、そのような状況ではない。また、仮説の推移を示すものとして、東坂本秋常遺跡から出土しているものがある。当遺跡からは胎土に雲母が認められるが、脚部の形状が二脚のものが出土している。二脚のものは基本的に第 1 段階のもので、胎土に雲母を含まず、色調も白みがかかるのが多く、第 1 段階での生産地と仮定した岡本から御厩に製造技術が伝播して生産されたため胎土は異なるが、脚部の形状は、第 1 段階のものを採用している可能性を指摘できる。

現状の資料からいえる時期的な推移に生産地が関係しているものと推測できるが、今後の資料増加もにらみつつ、検討を加えていきたい。

<素焼き風呂釜に必要な湯量>

どのように素焼き風呂釜をしようしていたのか。実際に入浴する際の湯量はどの程度必要であったのか、試算した。素焼き風呂釜の寸法は、瀬戸内海歴史民俗資料館に寄贈された資料から内法の寸法を計測すると、サナ（ゲスイタ）が乗る部分の直径 52 cm、高さ 65 cm を測る。そこから試算すると、満水にするには約 138ℓ が必要である。また実際に使用していた時期の明治時代の日本人の身長体重を考慮しなければいけないため、明治 33 年時点のデータを参考にすると 18 歳男性の平均身長が 160.0cm、平均体重 52kg である。

現在の一般家庭の浴槽であると満水にするには約 260～290ℓ 入り、実際にはその 7～8 割の湯をいれて入浴するのが適当とされることから、同様に素焼きの風呂釜も考えると、満水で 138ℓ であり、その 8 割である 110ℓ が必要。しかし人が入るとあふれてしまうので、体の 8 割が湯に浸かるとすると、平均体重 50kg の 8 割で、40kg (=40ℓ) をひく必要がある。110ℓ (湯量の 8 割) - 40ℓ (体の 8 割) = 70ℓ、つまり土製の風呂釜では、70ℓ が一回につき必要であったと考えられる。

おわりに

昔の人の入浴の一つには五右衛門風呂を使っていたという認識は間違いではないが、江戸時代には讃岐独自の入浴のための素焼きの風呂釜があり、その独自性を紹介した。また、それらの胎土の組成や部位の特徴から県内の生産地同士のつながりが見え隠れしていることが、素焼きの風呂釜をとおして少し垣間見えたと考える。

参考文献

荒木計雄 1978 『讃岐民芸館』

1981 『土風呂 岡本焼素焼風呂釜再現報告書』 四国郷土研究会叢書第 4 号

1982 「一つの資料を求めて～土風呂の発見と再現～」 『博物館研究』

1982 『民芸手帖』 3 月号 第 286 号

中野栄三 1970 『銭湯の歴史』

柳田國男 1915 「風呂の起源」 『郷土研究』 定本柳田國男集第 14 卷

1972 『学制百年史 資料編』

発掘調査で出土した風呂釜については、発掘調査報告書から引用